



＜教育目標＞

- 思いやりのある子ども
- 進んでやりぬく子ども
- じょうぶな子ども
- よく考える子ども

令和元年9月2日(月)

練馬区立豊玉第二小学校

校長 永井 美奈子

豊二小だより

9月号

東日本大震災の被災地を訪ねて

校長 永井 美奈子

44日間にわたる長い夏休みが明け、心身共に一回りも二回りも大きくなった子供たちが、元気な笑顔で学校に戻ってきました。夏休み中、大きな事件や事故もなく、再び子供たちの明るい笑顔を見ることができ、本当にうれしく思っています。これも、保護者や地域の皆様が温かく見守ってくださったお陰と、心より感謝申し上げます。

さて、私はこの夏、東日本大震災によって未曾有の被害を受けた南三陸町の地を訪ねてまいりました。震災から8年—南三陸の今を知りたい。苦難の中での復興の歩みを、実際に見て感じ、確かめたい。そんな思いが沸き上がっていました。私には宮城県で教師をしている妹がいるのですが、震災以前、妹は南三陸の小・中学校で教鞭をとっていたことがありました。そのような御縁で、私も何度かその地を訪れたことがあり、震災前ののどかな海辺の町並みや地元の方々の心の温かさをおぼろげながらに記憶しています。震災の翌年の夏に訪れた際には、町は跡形もなく、至る所に津波の爪痕による瓦礫が積み上げられている光景を目の当たりにし、復興の難しさを否応なく感じさせられたことを覚えています。

最後に訪れた時から早7年。町役場の職員の方々が、最期まで避難を呼びかけ続けて被災した防災対策庁舎は、震災の記憶を物語るかのように赤い鉄骨だけの姿になって残っていました。展望台から一望すると、すっかり瓦礫は取り除けられ、10mほど嵩上げして整備された土地に商店街が再建されていました。お盆休みの帰省客などで賑わう商店街の中で、妹の教え子の保護者の方にお会いすることができました。妹の教え子たちは、もう立派な社会人に成長しています。地元に残って家業を継ぎ新商品の開発に挑戦していたり、NPOで地域再生のための活動に励んでいたりする若者もいて、親から子の世代に復興が引き継がれている様子を伺うことができました。



鉄骨だけ残った防災対策庁舎と後方の嵩上げた土地に建つ商店街

また、商店街の一角に写真館があり、地元写真家の方が撮影した「震災当時からこれまでの南三陸の復興の歩み」に関する貴重な写真を拝見することができました。御自身も被災されており、震災当日、巨大津波が押し寄せせる中を必死で逃げながら、震える手でシャッターを切り続けたそうです。一枚一枚の写真から、南三陸を大切に思う気持ちと復興への情熱が伝わってくるようでした。「ふるさと」への思いが心に響くとともに、改めて防災について考えていくことが重要であると思われました。

9月1日は「防災の日」。この時期には、毎年防災に関する様々な訓練が行われます。本校でも毎月の避難訓練の他、14日(土)の学校公開では、練馬区一斉防災訓練に合わせて地震発生時の避難訓練を予定しております。当日、保護者の方もぜひ御参加くださいますようお願いいたします。さらに、「豊二小避難拠点運営連絡会」では、毎年10月に、本校の校庭において行政、地域、学校が連携した防災訓練を行っています。AED訓練やバケツリレーによる消火訓練等、子供たちに体験を通して学ばせたい内容がたくさん含まれており、多くの子供たちの参加を期待しているところです。学校では、地域の方々や保護者との連携を深め、いざという時に自分の力で的確に判断し、協働して自他の身を守っている子供たちの育成に努めていきたいと思っております。御協力をどうぞよろしくお願いいたします。